

乳児ビタミンK欠乏性出血症全国調査，補遺 ——沖縄県における再調査成績——

東邦大学小児科 塙 嘉之
沖縄県立中部病院小児科 安次 嶺 馨

目 次

厚生省心身障害研究班（分担研究者：塙）が、昭和60年に行なった本症の全国調査によると、その発生は本邦の南に多い結果となり特に沖縄では、出生に対する比率では、同県からの回答率が低いにも拘らず、把握した発生数は、全国のどの地域よりも高い結果となった。

このことから、同県で、更に詳しく再調査すれば症例数は更に高くなることが予想され今回の再調査を行なった。

方 法

前回の全国調査では、東邦大学から郵便により、11の病院に対してアンケートを行なったが今回は、分担研究者塙が直接沖縄県を訪れ、同地の小児科関係者に協力を依頼し、実際の調査は、県立中部病院小児科安次嶺が担当した。調査用紙および調査期間は前回と同じとし特発性、二次性ビタミンK欠乏性出血症について調査した。

結 果

今回は、前回の報告例と重複した2例を除き、新たに4症例を把握した。その内訳は、特発性3例、二次性1例の報告があったが、これは今回対象外であるので除外した。この結果に前回の11例（すべて特発性）を加えると沖縄県では15例が、昭和56年1月より同60年6月まで4年半に発生した事となり、このうち特発性14例についての発生

率は、同県の年間出生20,038人（昭和58）に対して年間出生6,441対1例となり、これは前回の全国平均16,632に対して約3倍の高頻度、また、最も発生が少ない北海道にして、約4倍という事になった。なお、把握された全症例についての性、年齢、栄養、臨床症状などについては全国レベルのものの特に相違はなかった。

考 按

沖縄における本症の発症の高い原因が、どこにあるのか、単にVKの摂取が低いためか、或いは気候など環境の原因が関与しているか今後検討を続ける必要がある。更に南の台湾その他の東南アジアでの状況も把握する事が望まれる。

結 語

沖縄において乳児VK欠乏性出血症の再調査を行ない、その結果本症が昭和56～60の期間では、全国で最も発生率の高かった事が確認された。（調査に協力頂いた沖縄の各病院関係者に感謝いたします。）

協力病院：琉球大学付属病院，県立中部病院，県立名護病院，県立宮古病院，県立八重山病院，県立那覇病院，県立南部病院，那覇市立病院，沖縄協同病院，沖縄赤十字病院，南部徳州会病院



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



目的

厚生省心身障害研究班(分担研究者：埴)が、昭和 60 年に行なった本症の全国調査によると、その発生は本邦の南に多い結果となり特に沖縄では、出生に対する比率では、同県からの回答率が低いにも拘らず、把握した発生数は、全国のどの地域よりも高い結果となった。

このことから、同県で、更に詳しく再調査すれば症例数は更に高くなることが予想され今回の再調査を行なった。